

嘘とペテンと盗み：CIAの科学レガシー

オーウェン・マーシャル著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

出典：Science for the People, Volume 25, No.3, 2023年6月3日

*脚注はすべて訳注

米国中央情報局（CIA）は創立75周年記念を迎え、それを機に自らをテクノロジー発展に寄与する進歩的力として再ブランド化しようと懸命である。「青白い顔のイェール大学卒の男性」であるベビー・ブーマー世代の時代が終わったので、今度は比較的若くてテクノロジーに精通したシリコンバレー世代を取り込もうとして、神経多様性やインターセクショナリティ（交差性）¹の言語をぎこちなく使っている。局内のベンチャー・キャピタル基金であるインキューテル（In-Q-Tel）を通じて、遺伝子操作によるマンモス復活技術研究、情報収拾に使えるスキンケア製品開発、合成生物学研究会社で空売りで大型詐欺事件を起こしたと言われるギンコ・バイオワークに投資している。

秘密軍事施設で拷問を指導したことで悪名を馳せた初の女性 CIA 長官であるジーナ・ハスペルのもとで、CIA は新しいラボを作って、種々の技術系スタートアップ企業モデルを採用している。ラボは金儲けになる特許権を餌にして多くの自称イノベーターを誘い込んだ。また、様々なメーカースペースや科学教育機関に寄付をし、それを自慢げに広報した。CIA に好意的な新聞は CIA エージェントを公共資金研究施設に潜入するスパイとしてではなく、「地球を守る調査員」と報道した。また、CIA はポットキャストをはじめてる。

しかし、CIA の歴史を少し顧みるだけで、CIA が信頼できる情報や社会的に有用なテクノロジーを国民に提供すると期待できる機関ではないことが、明らかである。昔から CIA などの米国の「情報コミュニティ」はずっと不法で有害で、意図的に人々に誤った判断をさせるような情報を流してきた。だから「情報」という言葉は間違いなく誤れる名称である。元 CIA エージェントで作家のラルフ・マクギーの説明によると、「CIA は情報局ではなくて、極秘行動局である・・・デマを流すのも極秘行動の一つで、私の経験に照らせば、デマで騙す主要な対象は米国民である。」

CIA の偽科学情報生産の先史

偽情報の流布や偽科学的発表は、CIA の設立以前から、米国の「情報コミュニティ」の常用手段であった。1944年に戦略情報部（OSS、CIA の前身）の士気作戦支部（MO）の支部長トーマス J. マクファデン中尉は著名な熱帯病専門家のモートン・チャールズ・カーン博士を雇用する資金を要求した。「博士は MO に雇用され、熱帯病に関する疑似科学的物質に関する論文を幾つか書いた」とマクファデンは報告書に書いた。その年、OSS はハ

¹ 国籍、性別、人種、階級、宗教、障害の差別は個別的でなく、交差・重複して作用しているという考え方。

ンセン病、食中毒、動物血漿に汚染された血を輸血して悲惨な死に方をしたなど、実際には起きなかった偽の医療報告を多量に流した。これらは MO の通常の仕事で、パニックと混乱を引き起こして敵の士気を挫くためのデマ情報である。

デマ情報を浴びせられるのは必ずしも敵国兵士だけではない。マクファデンは「成果と輝かしい『カムバック』 — カムバックというのはMOのデマ情報が AP 通信社のような有名メディアが信用して報道することを指す — 賛美」と題する経過報告の中でデマ情報の成功例をリストアップしている。極秘作戦が意図せぬ悪い結果をもたらすことは「ブローバック」と呼ばれるが、ブローバックとは対照的に「カムバック」はデマ情報 — 政府の嘘を国民が信じて受け入れたことを表す。

第二次世界大戦の破壊と死に比べれば、その後の科学的偽情報は比較的害が少なく、人道主義的装いを纏うように見えた。しかし、日本の降伏後、冷戦体制の中でOSSはCIAとして再出発し、政府の諜報機関と科学者界との病的な関係が発展した。CIA誕生から75年間にCIAがたくさんの科学的専門家を採用し、国家の行う残虐行為に関して嘘を書かせただけでなく、残虐行為を実行したのであった。

ペーパー・クリップ作戦²

CIAの最も初期の、そして最も重要な極秘作戦の一つは、数千人の著名なナチス科学者の暗い経歴を書き換えて米軍に協力させたペーパー・クリップ作戦である。アニー・ジェイコブセンは自著『ペーパー・クリップ作戦：ナチ科学者を米国に連行する極秘諜報活動』（邦訳『ヒストリカル・スタディーズ ナチ科学者を獲得せよ！—アメリカ極秘国家プロジェクトペーパークリップ作戦』、太田出版、2015年）で、CIAが「失うもの多く持ち、敗戦による自分の私的利益が危うくなることを気にしている」著名科学者を利用したことを、詳しく書いた。この作戦で米国は科学的諜報活動で有能なパートナーを獲得した。

有能パートナーの中には、例えば元第三帝国の外科医総長で、キャンプ・キング（770th USEUCOM 諜報センター）と呼ばれる CIA 秘密施設で戦争捕虜に対する拷問を指導したヴァルター・シュライバーや、ドイツ空軍の化学兵器科学者で、新種毒薬を探すように CIA によって世界各地に派遣されたフリードリッヒ・「フリッツ」・ホフマンなどがいた。キャンプ・キングは CIA がハイテク拷問テクニックやマインド・コントロールの開発・研究を行った最初の場所であった。ジェイコブセンによれば、「催眠術、電気ショック、化学薬品、違法麻薬などを使った非人道的で過激な尋問テクニックや行動変容プログラムが実験された。」

² 戦争末期から終戦後にかけて米軍はナチの優秀な科学者を米国へ連行し、化学兵器・生物兵器を開発させた作戦。日本の731部隊の科学者も戦犯として裁かれず、米国の生物兵器開発に従事した。

MK ウルトラ計画：科学の名を借りた国内及び国外におけるテロ行為³

しかし、ナチ科学者を雇って囚人や捕虜に新種の拷問を実験させたのは手始めにすぎなかった。1953年にはシュライバーやシドニー・ゴットリーブ（スティーブン・キンザー著『プリズナー・イン・チーフ：ゴットリーブと CIA のマインド・コントロール研究』（邦訳『CIA 裏面史：薬物と洗脳、拷問と暗殺』、原書房、2020年）で詳しく述べられている人物）などが MK ウルトラというコードネームで知られる非道な人体実験を始め、それが20年間続いた。ドン・キホーテ風の空想的な発想を資金でたっぷり裏打ちして、同意していない人や弱い立場にある人に対して、自白薬、洗脳薬、マインド・コントロールに使える薬などを投与することによって、研究・開発に没頭した。政府による3回にわたる調査が行われたにもかかわらず、公表されたのは全プログラムのごく一部にすぎなかった。大部分の資料は CIA がシュレッダーにかけて処分した。しかし、わずかに我々が知り得た部分だけでも、背筋が凍るような内容であった。

ゴットリーブは、OSSの退役軍人で連邦麻薬捜査官ジョージ・ハンター・ホワイトの協力を得て、国内や外国にアジトのネットワークを設け、そこで無垢な人々や軽犯罪者や麻薬患者など「使い捨てできる」人々を被験者として LSD を投与して実験した。「使い捨て」被験者には同僚科学者が含まれることもあった。例えば、細菌学者のフランク・オルソンは、米国が化学薬品兵器や生物兵器（CBW）を使っていることリークする恐れがあると疑われたので、LSD を注射されて人体実験被験者され、最終的に CIA に殺された。CBW に関しては CIA はかなり自由裁量的に使えたようである。1953年と1956年に CIA はニューヨーク市野外に生物薬品のエアロゾルを撒いて生物兵器戦争のテストをし、1955年にはフロリダ沿岸に百日咳菌を撒いて生物戦争のテストをした。

MK ウルトラ計画は大学の研究室でも行われた。コーネル医科大学やオクラハマ大学のハロルド・ウルフやルイス・ジョリオ・ウエスト、あるいはカナダのモントリオールにあるマギル大学のドナルド・ユーウェン・キャメロンも MK ウルトラ計画に関与した。1957年から63年にかけて、キャメロンは CIA から資金を貰って100人程の患者を「脱パターン」テクニック（depatterning techniques）⁴の実験台にした。このテクニックは麻薬を使って患者を長期的に昏睡状態にすること、数か月にわたって LSD を投与すること、電気ショックを施すこと、あるいはエンドレス・テープで「母は私を嫌っている」というメッセージを患者に繰り返し聞かせることなどを含んでいる。この実験台になった被害者とその家族による集団訴訟がマギル大学、カナダ政府、ローヤル・ビクトリア病院を被告として現在争われている。

³ MK ウルトラ計画とは CIA の科学技術本部とタビストック人間関係研究所が極秘に開発・実施した洗脳実験のコードネーム。

⁴ 患者の行動や思考パターンを解除させる統合失調症に対する治療法と言われる。

フェニックス作戦とその後

キャメロンの脱パターン実験から数か月後、ベトナムで似たようなことが始まった。1966年、CIAの科学者チームが精神病患者と見做されたベトナム人に非人道的で時には死に至る心理実験を始めた。ロイド H. コッター博士チームが、共産主義思想に感化されたとされる患者を無理やり労働させようと、電気ショックで脅かした。電気ショックに抵抗性が強い女性患者には食事を与えない脅迫で従わせようとした。

1968年のテト攻勢で米軍と南ベトナム軍が大負けをした後、CIAはフェニックス作戦を開始した。これはベトコンと疑われる人々を拷問に賭けたり殺害する組織的プログラムである。前述したコッター博士の実権より規模と残酷性においては比べ物にならないほど徹底した作戦である。1968～72年の間に8万人以上のベトコン・インフラ (VCT) — 共産主義勢力のシンパと見られる人々を表す婉曲語法 — が「中和化」された。中和化とは、容疑者を拉致して拷問にかけることで、そのうち30%を殺害した。

作家ダグラス・ヴァレンタインは何人かのCIA局員にインタビューした。それによれば、フェニックス作戦は国家暴力を通じた人民支配の強力な新官僚的技術となるので、ベトナム戦で敗色濃厚な米国にとって「希望の光」になったという。この作戦は、ホーチーミンルートにリモート・センサー・ネットワークを設置して目標を識別して攻撃する先端電子戦システムであるイグルー・ホワイト作戦と並んで、フェニックスのベトコン基盤情報システム (VCIIS) は、コンピュータ科学と対反乱作戦の強力な統合を達成した⁵。ベトコン・インフラの名前3000件がIBM1406大型コンピューターにデータベース化された。ヴァレンタインは「ブラックリストのコンピューター化時代」と名付けた。

冷戦からテロとの戦争へ

ソ連邦崩壊と米国の中東侵攻開始とともに、CIAは標的殺害 (target killing) — 現在名目上違法とされる暗殺の婉曲語法 — のためにリモコン・ドローン開発に巨額の資金を投入するなど、殺害技術を近代化した。標的殺害技術はジョージ W. ブッシュ政権で始まり、バラク・オバマ政権時代に頂点に達した。ジャーナリストのアンドリュー・コックバーンによれば、それを担当するのはCIA局員にとって出世コースであり、CIAのアナリストの20%がそれに関わっている。ドローンによる標的殺害は2002年2月にアフガニスタンで導入された。オサマ・ビン・ラディンが背が高かったため、背の高いアラブ人が標的となり、米軍が空襲で落とす砲弾の破片を拾っていた背の高い3人の罪のない農民が犠牲になった。

9年後、なおもビン・ラディンを追跡していたCIAは、パキスタンで偽の肝炎ワクチンを供給するという医療活動を始めて、住民から無断でDNAを採集した。ビン・ラディンの親族を見つけるためだった。元CIA幹部のステイブン・アーメントラウトが共同設立した

⁵ これに対して、ベトナム人は尿を入れたバケツを木にぶら下げてセンサーに反応させ、誤爆させるなど、人間的知恵で科学米軍を翻弄した。

パラボン・ナノラズ社は同じような遺伝子系図方法を使って、2016年に、当時の指名手配の凶悪犯「ゴールデン・ステート・キラー」⁶を特定した。しかし、その後、パラボン社は、遺伝子系図乱用、遺伝子によるプロファイリング、特に移民や亡命希望者や障害者など社会的に弱い者を犠牲にするとして、倫理学者、プライバシー保護活動家、遺伝子学者から批判された。移民や亡命希望者に関しては、米政府は2019年以来ゲノム情報を収集していた。パラボン社は、遺伝子学界からの猛反対にもかかわらず、個人の遺伝子表現型を総合的に解析する技術である「スナップショット」によって、容疑者の顔写真をDNAに基づいて合成できると、豪語していた。

「私はCIA長官だった。私たちは嘘をつき、人々を騙し、多くを盗んだ」 — マイク・ポンペオ

インキューテル (InQTel) やCIAラボと同じように、パラボン社のことも、国家の極秘行動であったCIAプロジェクトが私的企業事業へと、まるで悪性細胞のように転移した例である。その転移の過程で巧妙に民主的説明責任が回避された。ヴァレンタインは2017年出版の自著『組織犯罪としてのCIA』(The CIA as Organized Crime、未邦訳)の中で次のように警告している。

科学的情報の管理支配は国民の思想や考え方を管理支配する手段である。CIAがインターネット・プロパガンダの最前線に位置しているように、CIAの科学技術部門は世界を動かす産業を形成する最先端にいる。CIAはドローンや最先端兵器技術開発 — 支配階級に奉仕し支配階級に利益をもたらす技術発展 — の先端にいる。CIAはその方面の研究開発の最先端に位置し、インターネット利用でも同じである。

機密文書を公開してスパイ活動法違反で逮捕された軍人チェルシー・マニング、元CIA局員のエドワード・スノーデン、ウィキリークスのジュリアン・アサンジ — 2017年CIAは彼を暗殺しようとしたと言われる — のような告発者のリークが、資本蓄積と国家の極秘行動が深く結びついて情報機構を構成していることを証明している。最近、メタ(旧称フェイスブック)は元CIA職員と言われる多数の人々に依存して情報内容やデータ・セキュリティを開発したことを、アラン・マクロードが『マンスリー・レビュー』に書いた。同じことがグーグルにも言える。メタやグーグルのような会社が、兵器産業を除けば、コンピューター・サイエンスやエンジニアリングの雇用市場は言うに及ばず、一般の人々のオンライン情報アクセスやSNSによる交流を事実上独占支配している現状を考えると、我々はヴァレンタインの「CIAにとって科学は人民を管理し殺害する優れた手段である」という言葉をしっかり心に留めるべきである。

⁶ 1974～88年にカリフォルニア州で犯罪を繰り返していたジョゼフ・デアンシェロ・ジュニアのこと。

我々是如何に対応すべきか

最近の世論調査では、米国民のほぼ52%がCIAの働きを肯定的評価している。一方環境保護庁や食品医薬局に関する肯定的評価はそれぞれ36%にすぎない。この驚くべき国民反応は無知や無関心に起因するのか、それともCIAの怪しげな歴史を知ったうえでそれを支持しているためなのかは分からないが、CIAがもたらす悪影響、CIAや企業やNGOやシンクタンクなどを含む諜報複合体が社会に悪い影響をもたらしていることを、もっと国民に知らせることが大切である。科学者、技術者、あるいはCIAに雇用されるような人々が、大企業の資本蓄積と国家の帝国主義的支配強化のための様々なプロジェクトに巻き込まれず、国民の側に立って連帯する組織化が同様に重要であろう。

米帝国の斜陽化が次第に明らかになる現在、CIA職員もかなり神経質になり、ノイローゼ患者が増えているようだ。メディアの取材に際しても、CIA職員は精神健康のトラブルを訴えることが目立つようになった。それをきちんと分析すると、どうやら抑圧感や罪悪感に起因しているようだ。最近「ハバナ症候群」⁷ — CIAは脳震盪のような症状を引き起こす指向性エネルギー兵器による攻撃かもしれないと示唆した — が政府を悩まし、報道機関にあまり報道しないように懐柔し、被害者にカネを支給するなどして、封じ込めようとした。CIA自身の専門家はハバナ症候群現象そのものを全面否定するようになった。

一部の調査ジャーナリストはCIA犯罪を暴く仕事をやっているが、メディア全般は、この数十年間、政府権力に打ち負かされ、取り込まれてしまった。従順に政府発表だけを情報として報道する。いわばCIAの広報活動を代行している。例えば、ニューヨーク・タイムズ紙はCIAが人工衛星データを気候科学者と共同使用するというCIA企画を無批判に称賛した。米国科学者連盟(FAS)はCIAの透明性欠如を批判したのに。「透明性欠如は、CIA全体とは言わないが、CIAの気候変動と国家安全に関するセンターには透明性に対して誠意がない」と批判した。

FASなどの批判の声は、科学者に政治的意識が高まれば、将来CIA解体の方向へ進む可能性があることを示唆している。CIA解体は、ハリー・トルーマン、ジョン F. ケネディ、バーニー・サンダースなどの政治家が掲げた目標であった。CIAはテクノクラート権力構造の中で欠かせない役割を担ってきたので、CIAによる犯罪と社会に及ぼす悪影響を国民に知らせ、専門家である科学者や技術者が透明性を求める声をもっと大きくすることが必要である。暴露や解体という発想が過激というのであれば、CIAのために働くのは悪いことだという考えを常態化させることや、CIAの嘘や騙しや窃盗を批判し、CIAの主張を鵜呑みにしないという穏健な姿勢を一般化させるだけでもよい。CIA長官だったマイ

⁷ 2016年にハバナの米大使館とカナダ大使館の職員の間で頭痛や吐き気や眩暈が発生、それ以降世界中の米外交官やCIA局員が同じような症状を訴えた現象。政府は敵対国のよるマイクロ波攻撃の可能性を考えたが、現実性がなかった。バイデンは「ハバナ法案」を作成、脳障害が確認された職員に一人当たり18万ドルを支給した。

ク・ポンペオが「私は CIA 長官だった。私たちは嘘をつき、人々を騙し、盗んだ」と言った。CIA 指導部でさえ CIA を信用できないことを理解しているのだ。そろそろ我々もそうしなければならない。